

運動遊びを用いた模擬保育における学生の環境構成に関する一考察

A study on environment configuration by students in simulated childcare with physical activity play

坂口 将太*

Abstract

The study investigated the perspectives of students about environment configuration in simulated childcare with physical activity play, and the perspectives that should be noted by teachers to develop simulated childcare. The results are as follows: 1) Significant bias in the answers between the items of self-evaluation was not observed. 2) In the free description, the description relating to the contents of childcare was significantly more frequent than other descriptions. On the other hand, the description relating to the division of roles was significantly more frequent than other descriptions.

These results suggest that the perspectives and ideas of students can be broadened by the coaching and support of a teacher.

キーワード：保育内容「健康」、運動遊び、模擬保育、自己評価

I 緒言

遊びは、幼児にとって様々な機能や感覚の発達を促す上で非常に重要な役割を果たす活動の一つである。保育所保育指針解説書¹⁾および幼稚園教育要領解説²⁾の保育内容「健康」の領域において、「いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」という項目が明記されている。それについて、保育者は子どもの発達過程に合わせて十分に体を動かすことのできる活動を保障する必要があるとされている^{1),2)}。

さらに、近年では幼児の運動能力低下が取り上げられている。幼児の運動能力は1986年ごろをピークにして低下傾向を示し、ここ数年においては、低い水準を推移している現状にある^{3),4),5)}。この背景として、都市化や少子化によって社会環境や生活様式が大きく変化したことにより、幼児が身体を動かし

て遊ぶ機会が減少したことが指摘されている。加えて、幼児期における遊びを中心とした身体活動は、運動能力だけでなく、生涯にわたる健康の基盤や意欲的な心、社会性を身につける上でも非常に重要であることが示されている⁶⁾。これらを踏まえると、幼児の生活の中で身体を動かす遊びなどで身体活動の機会を確保していくことは、幼児の豊かな発育発達を目指す上で大きな課題であると言える。そのため、今後、保育において幼児が主体的に身体を動かす運動遊びを求められる機会が増えていくことが予想される。このことから、保育者は運動遊びを通して幼児の発育発達を促すことの意義や重要性を理解し、幼児の発育発達に合わせた運動遊びを提案していくことが重要であると考えられる。

また、保育においては、心情・意欲・態度・基本的な生活習慣などの人間形成の基礎を培うことが求め

* Shota SAKAGUCHI 聖和短期大学 専任講師

1) 厚生労働省 2008 保育所保育指針解説 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課

2) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 文部科学省初等中等教育局教育課程課

3) Sugihara, T., Kondo, M., Mori, S. and Yoshida, I. 2006 Chronological Change in Preschool Children's Motor Ability Development in Japan from the 1960s to the 2000s. *International Journal of Sport and Health Science*, 4 49-56

4) 杉原 隆・近藤充夫・吉田伊津美・森 司朗 2007 1960年代から2000年代に至る幼児の運動能力発達の時代変化。体育の科学57巻 69-73

5) 森 司朗・杉原 隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫 2010 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力 体育の科学60巻 56-66

6) 文部科学省 2012 幼児期運動指針ガイドブック 文部科学省スポーツ青少年局参事官(体育・青少年スポーツ担当)

られている^{1),2)}。そのため、保育者は子どもの豊かな発育発達を考慮して環境を構成していく必要がある。環境は自然環境や人的環境、物的環境といった形で分類されることが多いが、それぞれが相互に関わりあって構成されているため保育者は子どもの興味関心に基づいて最適な環境を構成していくことが求められる。

環境構成を学ぶ方法の一つとして、実際に保育を体験する実習や実際の状況を想定した模擬保育が挙げられる。実習は、保育所や幼稚園で実際に職員と同様に保育を行う点で非常に効果的な手法であるが、実習先の選定やスケジュール調整、事前指導など事前の準備に大きな労力を伴う。一方で、模擬保育は学生が保育者役と幼児役に分かれて、実際の保育現場を想定した保育を実施する手法である。実習と比べると、学生が幼児役を担当することや保育室で実施できないなど現実味に欠ける部分があるものの、実習に参加する前段階において保育の雰囲気を知ることやシミュレーション、トレーニングなどとして非常に有用であると考えられる。その中で、学生が自身の保育について評価することや気になった点などについて記述することは、自身が保育を進めていく上での有益な情報になると考えられる。加え

て、それらの情報は模擬保育を設定する教員に対して、学生の保育の質を高める上で重要な役割を果たすと考えられる。

そこで本研究では、実習に参加する前段階にいる短期大学生を対象として模擬保育を行わせ、それに対して学生が環境構成に関して着目する観点や教員が模擬保育を設定する上で留意すべき観点を明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. 対象者

対象者は、保育を専攻する女子短期大学生40名を対象とした。そのうち、不完全な回答8名を除く32名を分析対象とした（有効回答率80%）。

2. 模擬保育について

模擬保育は、保育科のある短期大学において開講された「体育」の授業の中で実施した。学生には、オリエンテーションを行い事前に体育館で模擬保育を実施する旨を伝え、指導案の作成および保育に必要な物の準備をするよう指示した。加えて、模擬保育を行う上での保育者としての観点や保育上の留意点等を説明した。

資料1 模擬保育に関する自己評価シート

模擬保育 授業評価			
①保育の流れはどうだったか（時間配分や活動のつながりなど）			
あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4
②保育の内容はどうだったか（導入、活動内容など）			
あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4
③安全管理はどうだったか			
あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4
④子ども（学生）への対応はどうだったか（声かけや指導・援助など）			
あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4
⑤役割分担はどうだったか			
あまり良くなかった			良かった
1	2	3	4
⑥今回の保育で良かったと思った点、気になった点（自由記述）			

模擬保育の設定は、5人1グループによる年中または年長を対象として運動遊びを用いた保育とした。模擬保育の実践時間は1グループ30分とした。模擬保育終了後に講義担当者が模擬保育に対するコメントを伝えるとともに、担当したグループの学生自身に自己評価を行わせた（資料1）。

3. 調査項目および調査方法

模擬保育終了後に保育士役を担当した学生を対象に自己評価を行わせた。評価項目は、「模擬保育の流れ（時間配分など）について（Q1）」、「模擬保育の内容について（Q2）」、「安全管理について（Q3）」、「子どもへの対応について（Q4）」、「役割分担について（Q5）」の5項目であった。各項目について、あまり良くなかった場合を1点、よくできた場合を4点とした4段階で自己評価を行わせた。

加えて、模擬保育を行った中で良かった点および気になった点について自由記述形式で記載させた。記述された内容を上記のQ1からQ5の項目に分類した。なお、どの項目にも当てはまらない記述は見られなかった。

4. 統計処理

質問間において評価に偏りがあるかを調査するために質問と評価についてのクロス集計表を作成し、 χ^2 検定を実施した。また、自由記述において学生がどの質問に関する内容に着目しているかを調査するために、自由記述の分類と記述の有無についてのクロス集計表を作成し、 χ^2 検定ならびに残差分析を行った。有意水準は、全て危険率5%未満とした。

III 結果

質問間での評価の偏りについて、質問と評価に関するクロス集計表を作成し、 χ^2 検定を行った（表1）。その結果、質問間における評価の偏りに有意差は認められなかった（ $\chi^2=16.424$, $p=0.173$ ）。一方で、自由記述において、学生が着目している内容について、自由記述の分類と記述の有無に関するクロス集計表を作成し、 χ^2 検定ならびに残差分析を行った（表2）。その結果、自由記述の分類における記述の偏りは有意に異なることが明らかとなった（ $\chi^2=9.894$, $p<0.05$ ）。残差分析を行った結果、「模擬保育の内容について（Q2）」に関する記述が有意に多いことが認められ、「役割分担について

表1 評価と質問項目についてのクロス集計表

評価		質問項目					計
		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	
評価1	観察度数	1	0	1	1	0	3
	割合	0.6%	0%	0.6%	0.6%	0%	1.9%
評価2	観察度数	106.3%	6	12	8	7	43
	割合	106.3%	3.8%	7.5%	5.0%	4.4%	26.9%
評価3	観察度数	17	20	13	17	11	78
	割合	10.6%	12.5%	8.1%	10.6%	6.9%	48.8%
評価4	観察度数	4	6	6	6	14	36
	割合	2.5%	3.8%	3.8%	3.8%	8.8%	22.5%
計		32	32	32	32	32	160

表2 自由記述における記述の分類と記述の有無についてのクロス集計表

記述の有無		記述の分類					計
		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	
記述無し	観察度数	25	18	24	20	28	115
	調整済み残差	0.9	-2.2*	0.4	-1.3	2.2*	
記述有り	観察度数	7	14	8	12	4	45
	調整済み残差	-0.9	2.2*	-0.4	1.3	-2.2*	
計		32	32	32	32	32	160

* : $p<0.05$

(Q5)」に関する記述が有意に少ないことが認められた。

IV 考察

本研究の目的は、運動遊びを用いた模擬保育の環境構成について学生がどのような観点に着目しているのか、教員が模擬保育を設定する上で留意すべき観点を明らかにすることを目的とした。

1. 学生の自己評価について

学生の自己評価について、 χ^2 検定の結果、質問における評価の偏りに有意差は認められなかった。 $(\chi^2=16.424, p=0.173)$ 。このことから、今回実施した模擬保育において、著しく低い評価もしくは著しく高い評価になった項目が無いことが明らかとなった。これについて、学生の模擬保育等の経験の有無が大きく影響を与えていることが理由として考えられる。今回対象とした学生は1年生で座学による講義がほとんどであり、本格的な実習が始まる前の段階であった。学生の中には、ボランティアとして保育所や幼稚園で活動している者も見られたが、自身が主体となって保育を進めていく経験はほとんど無い状態であった。また、本研究で対象とした授業において、模擬保育実施前に説明した保育者の観点や保育上の留意点は、「子どもの活動が主体になること」、「安全管理に気をつけること」や「学生を幼児と想定して保育を実施すること」といった内容であり、詳細な保育の観点については説明を行わなかった。そのため、自身の保育を評価するにあたっての知識や観点が十分ではなかったことが推察される。これらのことを踏まえて、今後、模擬保育を実施する上で事前に保育の観点や自己評価に関する観点について詳細な説明を実施することで自己評価からも学生の環境構成に関する観点が明らかになると考えられる。それに加えて、授業の中で実施する模擬保育の回数を複数回に増やすことで自己評価の機会が増え、学生が自身の保育について何度もフィードバックすることができ、自己評価や環境構成に関する観点をより詳しく明らかにすることができる可能性がある。また、自己評価について継続的に検討していくことで模擬保育における学生の観点的変化を明らかにすることができると思われる。

2. 自由記述の内容について

次に、学生の環境構成に関する観点をより詳細に検討するために、自由記述の内容について χ^2 検定および残差分析を行った。その結果、分類における記述の有無に有意な偏りが認められた $(\chi^2=9.894, p<0.05)$ 。残差分析を行った結果、Q2に関する記述が有意に多く、Q5に関する記述が有意に少ないことが明らかとなった。これらのことは、本研究の模擬保育において、学生はQ2の「保育の内容」に関する事柄に着目して環境構成を考える傾向にあったこと、一方でQ5の「役割分担」に関する事柄については環境構成を考える上であまり着目していなかったことを示唆している。Q2の「保育の内容」に関する事柄についての記述が多かった理由として、運動遊びを用いた模擬保育の経験の有無が大きく影響を与えていると考えられる。上述の通り、本研究で対象とした学生は1年生であり、初めての模擬保育であった。それに加えて、運動遊びという限定された条件下での模擬保育であったため、指導案を作成する段階からどのような内容を選択するかに注意が向いていたと考えられる。実際の記述内容においても、「子どもが楽しく活動できるように保育の内容を考えた」という記述や「実際に模擬保育を行ってみて、別の種類の遊びも加えれば良かった」といった記述が見られた。それらに加えて、「新聞紙を使った遊びを取り入れられたのは良かった」、「季節に合わせた物を有効活用できた」や「話す内容や段取りがいまいちだった」、「準備をした“つもり”ではいけないんだと感じた」といった環境構成に着目した記述が見られた。

一方で、Q5の「役割分担」に関する事柄についての記述が少なかったことについては、複数人での保育だったことが大きく影響を与えていることが考えられる。今回実施した模擬保育は5人のグループによる保育であった。また、各グループで自由に役割を設定して分担させる形で指導案を作成するよう指示していた。それにより、前に立って説明する役割を順番に回す形や完全に役割を固定して保育を進めていく形など、グループによって役割分担の方法が異なっていた。加えて、役割の内容について、詳細に検討しているグループは少なかった。これらのことから、役割分担に関しては他のグループと比較することが難しく、必要最低限の役割を果たしたかどうかの評価基準になっていたため自由記述への記載

が少なくなったと推察される。表1の自己評価においても、最高評価である4を付けた学生が14名と非常に多く、一方で1を付けた学生は一人もいなかった。このことから、役割分担に関しては多くの学生が十分に担当した役割を果たしたと感じており、自由記述に記載されることが少なかったという結果に反映したと考えられる。しかしながら、実際の模擬保育の様子を見てみると、保育者役の学生同士の連携が取れていない場面や役割が数名に集中している場面など適切に役割分担ができていない場面がよく見受けられた。保育の現場では、複数人で保育を行うことを複数担任制やチーム保育と呼んでいる。それら複数人で保育を行う場合に注意しなければならないこととして、各保育者が主体的に保育に携わることや固定的な役割分担に陥らないよう気をつけることが指摘されている⁷⁾。これらのことから、学生の持つ役割に対する考え方やその評価基準と保育者に求められる役割に対する考え方、評価基準が異なっていることが示唆できる。役割分担も人的環境の一つとして環境構成を考える上で重要な役割を果たすことから、模擬保育において役割分担の重要性を理解できるような機会を設けていく必要があると考えられる。

以上、本研究の結果から模擬保育において学生は保育の内容により注意を向ける傾向にあり、役割分担に関しては一度決めてしまうと注意が向かなくなる傾向にあることが示唆された。そのため、模擬保育を行うにあたって、教員が注意を向けてほしい観点や環境構成を事前に伝えておくことで学生の観点、環境構成を変えることが可能であると考えられる。授業内容に応じて観点を変化させ、学生の保育における観点を増やしていくことは、質の高い保育を提供できる保育者を養成することに非常に重要な役割を果たすと考えられる。また、そういった意図を持って授業を展開していくことが今後より一層求められると考えられる。

参考文献

- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説. 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課
 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説. 文部科学省初

- 等中等教育局教育課程課
 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針ガイドブック. 文部科学省スポーツ青少年局参事官 (体育・青少年スポーツ担当).
 森 司朗・杉原 隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫 (2010) 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力. 体育の科学 60: 56-66.
 小田 豊・奥野正義編集 (2014) 保育内容人間関係保育の内容・方法を知る. 北大路書房
 Sugihara, T., Kondo, M., Mori, S. and Yoshida, I. (2006). Chronological Change in Preschool Children's Motor Ability Development in Japan from the 1960s to the 2000s. International Journal of Sport and Health Science, 4: 49-56.
 杉原 隆・近藤充夫・吉田伊津美・森 司朗 (2007) 1960年代から2000年代に至る幼児の運動能力発達の時代変化. 体育の科学 57: 69-73.

7) 小田 豊・奥野正義編集 (2014) 保育内容人間関係 保育の内容・方法を知る. 北大路書房